二〇一二年一〇月二〇日

不老水汲場のむかご頂きぬ　よし女
文化祭ポスター埋まる掲示板　さつき
踏むまじと汝の後行く草紅葉　とも江
庭の柿甘し亡き子を悼みけり　あさこ
浮草の万華鏡めく紅葉かな　わかば
マウス繰る右手の先の夜寒かな　とろうち
しののめの雲押し広げ鳥渡る　菜々
捨てられし案山子存問する雀　宏虎

二〇一二年一〇月一九日

椎の木の天辺めざす蔦紅葉　なつき
爽やかにうれし涙を拭ひけり　せいじ
逝きし子の部屋そのままに夜寒かな　あさこ
川の岸余地なく鯊釣り人並ぶ　とも江
アカペラの洩るる聖堂秋気澄む　せいじ
工事場は不夜城となる秋灯し　ひかり
奏者なき自動ピアノのうそ寒し　うつぎ
教会の塔を離れし匕首の月　つくし
朝寒の富士は真白に日を弾き　とろうち
朝寒の双手に包む湯呑みかな　雅流

二〇一二年一〇月一八日

霧深しゴーストめける架橋かな　わかば
まだ続く貨物列車や秋日濃し　ひかり
命綱頼りに風の木樵虫　三刀
ラーメンの屋台が誘ふ夜寒かな　さつき
ライブらしライトアップの紅葉園　ぽんこ
子らに声かけられ牧のポニー肥ゆ　よし女
秋寂ぶや都に遠き万葉苑　菜々
数減りし鈴虫庭へ放ちけり　うつぎ

二〇一二年一〇月一七日

団栗の散らばってをる砂場かな　せいじ
喧騒に小さき苑あり昼の虫　満天
団栗が占領したるベンチかな　菜々
子宝の池澄み鯉のひしめける　なつき
大足の靴をはみ出す朴落葉　三刀
去ぬ燕無事にと祈る病者かな　よし女
初咲きの菊仏前に手向けけり　とも江
色変へぬ松駈け抜けて子等元気　有香
団栗の転がってくる車内かな　百合
森の秋日の斑浴びつつ吟行す　英子
秋冷や夜更けの雨の音高く　とろうち
老杉を搦めてのぼる蔦紅葉　さつき
どんぐりを手種に万葉苑めぐる　きづな
長寿眉揃ふ宮役秋祭　うつぎ

二〇一二年一〇月一六日

野良着翁今日は礼服秋祭　うつぎ
どんぐりをベンチに並べ子ら遊ぶ　有香
秋惜しむ音盤78回転　とろうち
木の実独楽大尻振って止まりけり　はく子
朝霧に濡れ風見鶏身じろがず　せいじ
一列に子らの行厨秋うらら　つくし

二〇一二年一〇月一五日

身に入むや電柱に貼る尋ね猫　宏虎
前山に鹿鳴き里の昏れんとす　雅流
鶏頭花志士集結の野に燃ゆる　よし女
曲がる腰伸ばして休む秋遍路　さつき
秋惜しむ屋上庭園一周し　満天
コスモスの縺れを風が解きほぐす　百合
秋日差す縮緬波の海峡に　わかば
秋冷の最終電車皆寡黙　こすもす
村祭り祝詞を囃す鴉どち　うつぎ
色鳥来立ち入り禁止札の池　よし子

二〇一二年一〇月一四日

縺るるといふことはなき秋の蝶　とろうち
水平線見ゆる高きに登りけり　さつき
コスモスに嬲られてをり石仏　菜々
爽やかや湯立ての巫女の赤襷　うつぎ
コスモスの迷路巡りて一万歩　よし女
遷宮を控へし大社秋の声　雅流
野路の秋ガイドはシニアボランティア　せいじ
秋澄むや真珠筏の海なぎて　有香
天高し海一望のスカイビル　満天

毎日句会みのる選・二〇一二年一〇月二二日